

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：34523

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19H04415

研究課題名(和文) 国際連携調査による日本とアジアの「頭上祭礼装置・かぶりもの」の実態把握と比較

研究課題名(英文) A contextual and comparative analysis of religious festival headdress in Japan and Asia through the international collaborative research

研究代表者

黄 國賓 (HUANG, KUO PIN)

神戸芸術工科大学・芸術工学部・教授

研究者番号：50441382

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本各地の「かぶりもの」(冠、頭飾り、傘など頭上に戴く造形物。以下、これらを総称として「頭上祭礼装置」とする)を主軸に、ユーラシア大陸の北東部、中央部、東南アジア各地の「頭上祭礼装置」における造形、神話的背景、象徴性、「頭上祭礼装置」を戴く者の祭祀空間における行動や仕草、宇宙観の5つの項目について研究調査を展開していた。さらに、それぞれを比較・分析しながら「頭上祭礼装置」の体系を解読してゆき、最終的にアジア「頭上祭礼装置」の造形デザインにおける日本の「頭上祭礼装置」の位置づけを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では造形という静的な要素のみならず、身体的・パフォーマンス的な動的要素を取り入れ、デザイン分析の新たなアプローチの方法を構築した。研究で得たアジア「頭上祭礼装置」のチャートや図解分析などのビジュアル手法を用いたデザインの実践を行い、新たな視覚言語の構築を試みた。本研究を通じて、現代社会におけるアジアデザインの研究の新たな可能性や役割について考えることもひとつの役割であると考え、編み出されるアジアデザイン研究の方法論は、今後、別のクリエイティブ領域でも応用することが可能であり、新たな方法論を築くという点から見ても創造性高い教育的価値があるといえる。

研究成果の概要(英文)：This study focused on "kaburimono," or ceremonial headgear devices such as crowns, head ornaments, and hats from various regions of Japan. It extended to examining similar headgear from northeastern and central Eurasia, and Southeast Asia, across five aspects: 1) form, 2) mythological background, 3) symbolism, 4) actions and gestures of wearers in ceremonial spaces, and 5) cosmology. By comparing and analyzing these aspects, the study aimed to decode the system of ceremonial headgear devices and elucidate the position of Japanese headgear within the broader Asian design framework.

研究分野：アジアデザイン

キーワード：かぶりもの 頭上祭礼装置 須弥山

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) アジア文化圏(ユーラシア大陸の北東部、中央部、東南アジアの広がり)では、古代から各地にユニークな「かぶりもの」(冠、頭飾り、傘など頭上に戴く造形物。以下、これらを総称として「頭上祭礼装置」とする)が存在する。これらの「頭上祭礼装置」は、アジアに広くひろがる宇宙観、宇宙山(須弥山)のイメージ、生命樹を象徴する造形の集合体として、地域や民族の宇宙観を示しながら時代の流行などを取り入れ、多様な造形を育んできた。

(2) これまで本研究メンバーはアジア各地に伝えられた様々な山車、生命樹、聖山(須弥山)の形態・構造・象徴性と祭礼における役割を解明してきた。本研究で取り上げるアジアの「頭上祭礼装置」は、アジア諸民族の造形の中でも繰り返し見てきた造形(冠、傘、笠、生命樹、聖山…)でありながら、日本の祭礼文化における「大念仏笠」「花笠」「風流傘」の宇宙観、身体観、神話世界を貫く造形の基本原理を見出そうとする有効なテーマであると考え、この研究の着想に至った。

### 2. 研究の目的

(1) 本研究は日本各地の「頭上祭礼装置」を主軸に、ユーラシア大陸の北東部、中央部、東南アジア各地の「頭上祭礼装置」における①造形②神話的背景③象徴性④「頭上祭礼装置」を戴く者の祭祀空間における行動や仕草⑤宇宙観の5つの項目について研究調査する。

(2) アジアの「頭上祭礼装置」のデザイン実態把握と国際連携調査を通して、アジアの宇宙観(聖山)、霊獣、生命樹などの信仰を概念とするアジアの「頭上祭礼装置」の体系を解読してゆき、アジア「頭上祭礼装置」の造形デザインの中に、日本の「頭上祭礼装置」の位置づけを明らかにする。

(3) 本研究で得た知見や図像、写真、映像記録を文化人類学およびクリエイティブ領域の観点からデータベース化・共有することで、アジアの造形文化の保存・継承・今日のデザイン教育ならびに創作活動の持続的発展へと繋げる。

### 3. 研究の方法

(1) 本研究はデザイン学、文化人類学、図像学、地域学、空間学、哲学、民族芸術学などの方法論(文献資料整理、フィールドワーク、研究会、取材)を援用しながら、アジア各地の仏教儀礼に現存し、文献や図像に残る多くのかぶりものの記録、原資料との比較・分析を行った。「かぶりもの」の外観だけでなく、「かぶりもの」を戴く者の祭祀空間における行動、仕草、装飾意味や象徴性と祭祀空間との関係についても聞き取り調査や文献調査を通じて、アジア各地域特性を比較分析した。シャナ冠の研究では、シャナ冠の構造原理(図1)をパーツ化によって分解し、日本における密教と関わる図像と比較しながら、シャナ冠各パーツの意味を明らかにした。日本の「頭上祭礼装置」の研究では、実物の「念仏踊り」「花笠」「風流傘」のフィールドワークを基盤に、平安中期から江戸後期にかけて蓄積されてきた「念仏踊り」「花笠」「風流傘」の造形、図像、文献研究を重ね合わせ、構成原理の分析を進めた。中国の冕服体系における冕冠、冕服の構造原理に関する研究では、中国古代の封建制度における「礼数」「陰陽五行」や「色」といった概念がいかに冕服の中に応用されてきたかを探究した。また、北東および中央アジアのシャーマンの「かぶりもの」の造形が韓国、日本北方の「頭上祭礼装置」や「かぶる笠」「花笠」「風流傘」の構造原理に非常に似ているため、本研究では中国研究者の協力を得て、祭礼が行われる時期に合わせた参与調査や実測調査を行った。



図1 シャナ冠の構造原理

### 4. 研究成果

(1) 本研究で取り上げられたブータンチベット仏教、インドチベット仏教における8点のシャナ冠の造形原理、及びその影響を受けたとされる日本の仏教文化と関連する造形、図像の象徴性、意味性を読み解くことについて試みた。本研究では、日本の仏教文化が現在でも大陸のチベット仏教文化を色濃く残していることを改めて証明し、また、これまでに明らかにされていなかったチベット仏教のシャナ冠造形にみられる各々のパーツの意味、象徴性を日本における仏教の造形、図像の検証を通じて、明らかにした。ブータンとインド地域におけるシャナ冠の造形は宗派や地域によってその外観はやや異なっているが、造形原理の探求、比較研究との重ねあわせにより、以下の10点が明らかになった。

① 両地域のいずれも、シャナ冠が宇宙の中心に聳える須弥山の表現であった。シャナ冠の突起から堆積物、髑髏、金剛杵、宝珠までの縦軸の構造原理がチベットの須弥山世界の構造図と重

なり、天地をつらぬく宇宙の中心軸として日・月を超えるほどの壮絶な高さで造形されていた。

② シャナ冠の半球形の突起(須弥山)の正面に書き込まれている金剛十字護符は、仏教思想における宇宙を構成する五大元素(地、水、火、風、空)、須弥山、衆生世間、太陽・月・火炎などの十種の力を備え、シャナ冠をかぶる踊り手に最強の力を注ぎ込む。

③ 突起(須弥山)の周りに記されている5字のランジャンナー文字が阿闍如来、宝生如来、阿弥陀如来、不空成就如来、大日如来五仏の力を表わす呪符であり、五仏は上述の宇宙を構成する五大元素を表す一方、金剛界曼荼羅の構成における五仏の配置にも重なっている。

④ シャナ冠の円盤形の底の上に描かれている六芒星の護符は、陰陽結合、宇宙バランスの調和を表すものである。その中心に置かれている突起(須弥山)はビンドゥーを表すものであり、仏様のお力による、凝縮された宇宙のパワーをそこに集めると考えられる。

⑤ 六芒星の護符は、六字真言、目紋との組み合わせにより、病魔、災難、悪業から逃れ、悪霊がやってくるのを防ぐ力があると考えられる。

⑥ シャナ冠における髑髏は、「屍陀林」を司る屍陀林王との関連があったと考えられ、チベット仏教の無常観を表す一方、悪霊に対する鎮静、征服、殺害、祓いなどの重要な役割を担っている。

⑦ シャナ冠の髑髏の上に立てられている金剛五鈷杵は、仏塔の心柱と同じように、宇宙の中心軸として天地をつらぬく。シャナ冠の金剛杵は五智如来や雷の力の集結により、衆生の煩惱を打ち砕く、悪魔を払うという役割を担っていると考えられる。

⑧ シャナ冠の半球形の突起の両側に現れている黄金渦のうねりは、須弥山に巻きつく難陀と跋難陀龍王(蛇)を表す一方、天の火と地の水2つの生命力を見立てるものだと考えられる。

⑨ ブータンチベット仏教のシャナ冠の天辺に挿し込まれている尾羽根は、インドチベット仏教のシャナ冠に現す激しく燃立つ火焰宝珠の意味と重なる。いずれも魔除け、災難をはらう力、衆生への救済をもつ意味以外、宇宙の「火」と「水」の力の結晶による火焰宝珠から放つ輝く光でもあり、それは仏の背後に発する「光背」の考え方にも重なっている。

⑩ シャナ冠における法輪、宝珠、鏡は同一の性質をもつ。ともに輝く太陽のような「法」の力を表し、邪気や悪霊を退治する力があると考えられる。

(2) 本研究では、日本の「頭上祭礼装置」の役割、とりわけ、大念仏踊りの大笠の中央に立つ仏塔と五輪塔、四つの門、須弥山、曼荼羅との関連を明らかにした。

① 日本における「頭上祭礼装置」の役割は、以下の三つに分類されると考えられる。まず第一に、人間の生存に必要な食料を願う祈りや願望を表すものである。これは、豊かな収穫や豊漁を願う心情を冠物で象徴している。第二に、悪魔払いの冠物が挙げられる。これは、食料や自然資源を豊かにするために、土地に悪魔が存在し、冷害や地震、津波などの災害を引き起こすという考え方に由来する。この悪魔を追い払わなければ、豊かな収穫は得られないという信念がある。そして最後に、鎮魂供養の冠物がある。この冠物は、浮遊霊として現れる悪霊に関連しており、亡くなった人々の魂を鎮めることで、彼らが悪魔と化さないようにする目的がある。このような考え方には、供養を通じて悪霊を追い払い、魂を安らかにするという二つの意味が含まれる。

② 五輪塔の上の円い形は、東の阿闍如来が象徴する水の働きを表している。三角形は西の阿弥陀如来が象徴する火の形を示している。半球形の形は北の不空成就如来が象徴する風の働きを示し、一番上の目に見えない形は、涅槃が成就した光そのものである大日如来の形であり、空を表している。曼荼羅の仏たちの象徴性を積み重ねることにより、五輪塔、すなわち仏塔が形成されるのである。仏塔の形は大念仏踊りの大笠の中心に立つ仏塔と重なり、曼荼羅の中に座っている五人の仏たちの姿と働きを象徴しているのである。

③ 大念仏踊りの大笠の四方向に配置されている四つの門は、曼荼羅の中心と東南西北に座する五仏が示す心身浄化、すなわち心の修行過程を表していると考えられる。これらの門は、山伏が修行の際に山に入ることが、門をくぐって異界に行くことと重なるのである。山の中は母の胎内とされ、そこに行き帰る行為を繰り返すことによって、その力が徐々に高まるといわれる。また、大笠という「頭上祭礼装置」のデザインは、浄土の世界と行き来することを象徴していると考えられる。大念仏踊りの大笠の中心に立つ仏塔の意味は、ブータンのシャナ冠の構造原理とも重なり、須弥山を模した曼荼羅の世界観を象徴するものである。

(3) 本研究で取り上げられた古代中国の冕服体系における冕冠、冕服の構造原理に現している「冕旒」、「章」と「礼数」、「色」と「陰陽」、「天円地方」、「五色」、「五方位」と「五行」の関連、とりわけ、天子を象る「天の大数」表す「12」と「5」の意味と「君権神授」、「天人合一」の宇宙観念を読み解くことについて試みた。造形原理の探求、比較研究との重ねあわせにより、以下の5点が明らかになった。

① 冕冠ついて、中国では「爵弁」、「兜」、「皇」三つの起源説があったが、爵弁はそのデザインが冕冠と一致しており、単に「旒」を持っていないだけである。さらに、爵弁が冕冠よりも1階級下であるという観点から見ると、この2つの冠のデザインは、明らかに周代の封建制度において階級を示すために「旒」が使用される思想観念を反映している。そのため、本研究では冕冠の原型が爵弁から派生したものであるという説に賛同する。

② 宋代の聶崇義が著述した『三礼図』に描かれている衮冕の総玉数は182玉であり、鷩冕の総玉数は156玉という表現が『周礼』の記述と異なっており、衮冕の総玉数は288玉、鷩冕の

総玉数は216玉のほうが正しいのである。

③ 天子、公、侯、伯、子、男、孤の冕服制度における「等級構造」は、数列の手法が利用され、極めて高度な「数値化」で示されていることが明らかである。この「数値化」は、古代の封建社会においては、「礼数」と称される規範に基づいており、「礼数」によって、行政上の管理が容易となり、階級や身分の厳格な配置と明確な表示が可能となったのである。

④ 冕冠の前後にはそれぞれが12本の「冕旒」があり、一本の「旒」は12個の玉で飾られているという考え方は、それが古代の人々の自然観に密接に関連しており、すなわち「12」を「天の大数」としてみなされ、「天人合一（天道）」を数値化したシンボルに由来すると考えられる。「天道」は天子の衣飾の究極の解釈として位置付けられ、その根拠を合理的に解釈を与えることで、冕服は「宇宙」からの自然な秩序を「等級制度」に投影し、天地の秩序と社会的階層の秩序の象徴となったのである。

⑤ 冕服に現されている朱、白、蒼、黄、玄の五色玉の朱(赤)は火に、白は金に、蒼(青)は木に、黄は土に、玄(青黒)は水に対応しており、五行を象徴するものである。五色の「5」というのは単に五色や五行を表すだけでなく、古代人の空間意識が四方向の分割から更なる発展を遂げる結果としての数字であり、東、西、南、北、中の五方向の概念が定着するにつれて、「5」は徐々に「天地の中心の数」として見なされ、宇宙と万物の共通の普遍的な構造や秩序を表すものと考えられる。冕服に表れている陰陽五行思想は、いずれも森羅万象、天地四方の流動的な働きが語られ、五色の具備は天地の徳が合い、五方の神霊と通じ合い、時空間が溶け合っただけでなく、一体化することを象徴する。もしも五色が揃わない場合、宇宙の秩序を破壊してしまうこととなり、「天象人倫」との一致性がなくなる。これは冕服における陰陽五行色の本当の意味と考えられる。

(4) シャーマンの冠の研究では、主に東北地区のシャーマン服飾、その冠(神帽)の芸術類型、構造の特徴、神服(儀式的装束)のデザイン、装飾の特徴、それが象徴する深い意味、肩掛けやスカート、手袋の装飾図案などの調査研究をまとめたものであり、中国ひいては人類の原始原生における物質文化や精神文化の考察に、貴重な歴史鏡像を提供するものである。シャーマンの冠に関する研究成果は以下の3点に挙げられる。

① 満州の社会で見られる鷹鳥式シャーマンの冠の造形はシャーマニズムの霊禽崇拜に起源を持つ。鷹はシャーマニズムの概念において、天と地を結ぶ使者としての象徴であり、天に昇り地に降りることができることから、人と神とを結ぶ存在としても理解される。また、宇宙における変化をもたらし、人々や万物の生命を創造する女神の象徴でもある。冠に付けられる鳥の数は一般に3羽であり、時には9羽、13羽、または15羽にも達することがある。これらの数は全て奇数であり、吉祥なものとする。鳥の数はシャーマンの神事の経験や力量、そして神への信仰の象徴として認識されていた。シャーマンが神事を司る経験を積み、その声望が高まるにつれて、鳥の数は次第に増えていくものである。

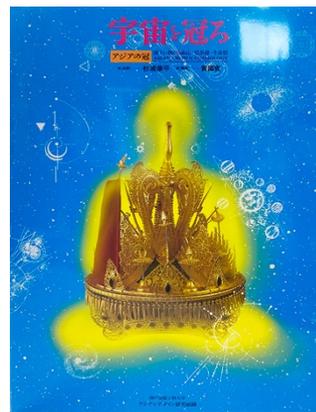


図2「宇宙を冠る」報告書

② オロチョン族、エヴェンキ族、ダフル族、ホジェン族などのシャーマンの冠は、多くが鹿の角の形をしている。シャーマンが鹿角式神帽をかぶるのは、角があれば悪魔や妖怪と闘うのに都合が良いためである。鹿の角が武器として機能する理由はもう一つある。鹿の角は木の枝のような形をしており、春に生えて冬には落ちるが、これはまるで樹木が春に芽吹き、秋には葉を落とすようである。このことが古代の人々に、生き生きと休むことなく続く生命のイメージを与えた。彼らの思考の中では、鹿の角が春に生えてやがて落ちることは、樹木の生命輪廻と同じであり、生命力の繰り返される再生であると受け取られた。そのため、鹿の角も生命の樹の象徴である。生命の樹とはすなわち、樹に託した永遠の生命への信仰のモチーフである。

③ ホジェン族のシャーマンの冠は三つの派に分かれる。河神派、独角龍派、江神派である。この三派は冠のデザインの特長から分類される。冠の上部左右にそれぞれ一本ずつ鹿の角があるものが河神派、二本あるものが独角龍派、三本あるものが江神派である。したがって、シャーマンがどの派に属するかは冠を見れば一目瞭然である。また、シャーマンの冠の造形からシャーマンの法術の等級も見分けることができる。主に鹿の角の又の数でその高低が分けられている。鹿の角は3つ又、5つ又、7つ又、9つ又、12又、15又の6級に分かれる。シャーマンの初心者には三年修業を積まなければ鹿角神帽を被る級には進めない。15又まで昇級するには40年もかかる。したがって、シャーマンがどの派に属するかはその角の本数を、等級を判別するにはその角の又の数を見なければならぬ。これは他の民族のシャーマンの冠の造形と大きく異なる。

(5) 「宇宙を冠る」の報告書(図2)では、これまで調査してきたユーラシア大陸の北東部、中央部、東南アジア各地の「かぶりもの」に関する①造形②神話的背景③象徴性④「かぶりもの」を戴く者の祭祀空間における行動や仕草、⑤宇宙観の5つの項目について研究調査の成果をまとめ、さらに、それぞれを比較・分析しながらアジアにおける「かぶりもの」の体系を解説した。報告書の執筆は日本(4名)、中国(1名)、台湾(1名)、韓国(1名)、インドネシア(2名)、イラン(1名)計10名の研究者によって行われ、A4判で6章からなり、252ページに及ぶ。そのうち32ページはカラー図版とその解説で構成されている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 黄國賓、杉浦康平	4. 巻 0
2. 論文標題 「宇宙を冠る」：シャナ冠の造形原理を読み解く試み	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 芸術工学2021	6. 最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 黄國賓	4. 巻 0
2. 論文標題 アジアデザイン研究所と杉浦康平	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 杉浦康平のアジアンデザイン	6. 最初と最後の頁 188-195
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 小岩秀太郎、杉浦康平
2. 発表標題 「踊るジオラマ」：日本の民俗芸能の世界観
3. 学会等名 神戸芸術工科大学アジアデザイン研究所（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 胡衛軍
2. 発表標題 東北地区シャーマン服飾調査研究報告
3. 学会等名 神戸芸術工科大学アジアデザイン研究所（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 曾和英子
2. 発表標題 満州族シャーマンの神帽にみられる陰陽要素
3. 学会等名 13th アジアデザイン文化学会国際研究発表大会 in日本浦安市（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 黄國賓、杉浦康平、さくまはな、曾和英子
2. 発表標題 宇宙模型としての、アジアの冠
3. 学会等名 神戸芸術工科大学芸術工学研究機構アジアデザイン研究所
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 杉浦康平、黄國賓、胡衛軍、朴亨國、小岩秀太郎、ニョマン・スダルサナ、イ・マデ・シディア、モジュガン・ジャハンアラ、曾和英子、さくまはな	4. 発行年 2024年
2. 出版社 神戸芸術工科大学アジアデザイン研究組織	5. 総ページ数 252
3. 書名 宇宙を冠る	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>「宇宙を冠る」：シャナ冠の造形原理を読み解く試み  <a href="https://kobe-du.repo.nii.ac.jp/records/291">https://kobe-du.repo.nii.ac.jp/records/291</a>          神戸芸術工科大学30周年記念 アジアンデザイン研究所 研究活動・回顧展  <a href="https://www.kobe-du.ac.jp/2019/10/67489/">https://www.kobe-du.ac.jp/2019/10/67489/</a>          第13回アジアデザイン文化学会国際研究発表大会（令和元年12月7日）  <a href="http://www.city.urayasu.lg.jp/shisei/koho/topics/1025179/1027990/1028082.html">http://www.city.urayasu.lg.jp/shisei/koho/topics/1025179/1027990/1028082.html</a></p>
---

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	杉浦 康平  (SUGIURA Kohei)  (00226432)	神戸芸術工科大学・附置研究所・名誉教授    (34523)	
研究分担者	さくま はな  (SAKUMA Hana)  (00589202)	神戸芸術工科大学・芸術工学部・准教授    (34523)	
研究分担者	曾和 英子  (SOWA Eiko)  (80537134)	神戸芸術工科大学・附置研究所・研究員    (34523)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	胡 衛軍  (HU Weijun)	吉林大学	
研究協力者	朴 亨國  (PARK Hyounggook)	武蔵野美術大学	
研究協力者	小岩 秀太郎  (KOIWA Shutaro)	縦系横系合同会社代表	
研究協力者	スダルサナ ニョマン  (SUDARSANA Nyoman)	バリ舞踊の踊り手	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	イ・マデ シディア  (I Made SIDIA)	インドネシア国立芸術大学デンパサール校教授	
研究協力者	ジャハンアラ モジュガン  (JAHANARA Mojgan)	元テヘラン芸術大学教授	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 ブータンの信仰と祭り（祭礼）の形（神戸芸術工科大学）	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 東アジアのかぶりものとその象徴性（長春師範大学）	開催年 2019年～2019年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
中国	吉林大学考古学院			
ブータン	Pung Thim Dratsang僧院			
中国	長春師範大学	シャーマン文化研究所	研究員	